

□ 書評 □

松井和子(著)

頸髄損傷

自立を支えるケア・システム

前田朋子

(中部労災病院リハビリテーション診療科)

脊髄損傷、とりわけ頸髄損傷は、本書の中でも「専門医でさえ、頸髄損傷は最も悲惨な外傷と定義する」と述べられているほど、臨床で直接関わるスタッフにとっては力量の問われる対象である。身体機能に対するアプローチは、ある程度マニュアル化されている部分もあるが、心のケア、特に重度の障害者に将来の展望を示し、生きる希望を与えることは、並大抵のことではない。

本書は著者の豊富な経験と頸髄損傷者との深い交流から生まれたものであり、経験の少ない関係者には特に助けとなるであろう。本書は3部から構成されており、第1部の「頸髄損傷とは」では受傷後搬出時の二次損傷の問題や、初期の予後予測の問題などが指摘されている。第2部の「日本の頸髄損傷」の中ではフィリピンで生活する日本人の頸髄損傷者や、ベンチレー

タ離脱訓練の様子などが生の声で紹介されている。受傷直後の気持ちから、10年以上経過した人の生きざままで、健常者をも励まされるほどの内容である。そして第3部ではブリティッシュ・コロンビア州(カナダ)の頸髄損傷プログラムが紹介され、現在の日本では考えられないようなすばらしいケアシステムがあることを知らされる。

本書はやさしい言葉で書かれているため、医療従事者はもちろん、頸髄損傷者本人や家族の方にも読んでいただきたい内容である。ただ、医学系の出版物であるため、本人や家族の目に止まる機会は少ないと思われる。医療従事者からの情報提供を望みたい。良い情報を適した時期に提供することで、頸髄損傷者自らが前向きに生きるきっかけをつかんでくれるかもしれない。本書はその良い情報源となるであろう。しかし、学問的知識のみ必要な方や、試験の参考書を探しておられる方にはお推めできない。頸髄損傷者と正面から向き合い、その心のケアや社会参加まで含めて考える人のための本である。

(A5, 248頁, 図11, 定価2,884円(税込)〒400, 医学書院・刊)